

## 入れ墨の大きさによる印象研究

### 問題・目的

本研究は入れ墨の大きさが印象にどのような影響を与えるのかを明らかにするための研究である。過去の経緯もあり、現在の日本社会には入れ墨に対してネガティブな認識があるといえるだろう。加えて、その大きさが対象の一部の特性を強化する印象を与えるという知見もある。これらから「大きい入れ墨はよりネガティブな印象を与える」という仮説を設定し、その検討を行った。

### 方法

主に20代を中心とした106人(男性：34名，女性：72名)を対象としてGoogleフォームを利用した調査を行った。同一の図版の大きさを編集して小、中、大の3つの写真を作成し、それを人の背中の写真と合成することで、入れ墨の刺激とした。それぞれについて20の印象評価項目を用い、5件法で回答を求めた。刺激となる入れ墨の絵柄は一般的にネガティブな印象を与えるものとして髑髏の絵柄を採用した。印象評価項目はコラージュ作品に関して印象研究を行った園田・近藤(2006)の研究を参考にし、独自の項目を加えて作成した。なお、提示順の上昇効果を相殺するために小、中、大の質問紙と大、中、小の質問紙を作成してランダムに配布、または二つのうちひとつに回答を求めた。

### 結果・考察

小、中、大のそれぞれの項目に対する回答を1から5点に変換し、1要因分散分析を行うことで大きさごとの項目平均値の差について検討した。分析の結果、「アブノーマルな」、「怖い」、「親しみにくい」などの項目において小さい入れ墨よりも大きい入れ墨の方の平均が有意に高かったことが明らかになったため、これらの項目では仮説である「大きい入れ墨はよりネガティブな印象を与える」は支持されるという結論に至った。特に「怖い」の項目は多重比較の結果、小、中、大の間でそれぞれ有意な差があったこと、そして反対の印象評価項目である「怖くない」の項目においても大、中、小の逆順で有意な差があった。しかし、大きければ否定的であるが、小さければ肯定的というような平均値の差異はなかったことから、どんな大きさの入れ墨を入れてもネガティブな印象が大幅に悪化するわけではないものの、小さい入れ墨を入れたとしてもネガティブな印象が大幅に軽減するわけでもないといえるだろう。

また、「大胆な」、「個性的な」、「開放的」はポジティブな印象項目にも関わらず大きいほど平均値が高くなって、大きいほど印象が良くなる結果が得られた。長谷川ら(2011)や大中ら(2003)の研究でも類似している結果が得られたことから、これらの項目は刺激の大きさや広さに直接的に関連すると考えられるだろう。「個性的な」の項目に関しては現段階では世間一般における普通ではない大きさから有意な結果が得られたと考えられるが、入れ墨を絵柄、色彩、部位に伴って再検討の必要性を感じる。

## 対人関係における主観的幸福感

### 問題・目的

本研究では、友人関係における主観的幸福感に着目し、その高低は、社会が求めるようなコミュニケーションスキルの高低によって左右されるものではなく、友人に受け入れられているという感覚、被受容感によって左右されるものであるという考え方から、これらについての検討により、現代に求められるコミュニケーションスキルがもたらすものを正しく捉え、社会が推奨している能力を持っていることが、友人関係における主観的幸福感を持つことにつながるとは限らない、ということの解明することを目的とした。それぞれ仮説は以下のようである。

仮説 1：友人関係における主観的幸福感とコミュニケーションスキルの関連は低い

仮説 2：友人関係における主観的幸福感と被受容感の関連は高い

### 方法

2021年8月14日から11月6日に Google form を用いて作成された質問紙を、SNS ツールである LINE にて配布した。対象は、既存の友人関係を持ちつつ、まだ職場での立場が安定していない、社会人1年目に絞られた。質問内容は、既存尺度である「コミュニケーションスキル尺度（24項目）」、「被受容感尺度（16項目）」、新たに作成した「友人関係における主観的幸福感尺度（20項目）」を使用した。

### 結果・考察

友人関係における主観的幸福感と個人の力であるコミュニケーションスキルとの関連、他者から得られる被受容感との関連について相関分析をおこなった。その結果、コミュニケーションスキル、被受容感共に友人関係における主観的幸福感との間に有意な低い相関があり、また比較的被受容感はコミュニケーションスキルよりも相関が高いものとなった。仮説2の、友人関係における主観的幸福感と被受容感の関連は高いという仮説が支持されるには至らなかったが、コミュニケーションスキルよりも関連が高いという点では支持されたのではないだろうか。より詳しい結果を得るため、それぞれの因子と友人関係における主観的幸福感因子についての検討もおこなった。結果、コミュニケーションスキル尺度の5つある因子のうち、友人関係における主観的幸福感との間に有意な相関がみられたのは表現力因子、他受容因子の2因子のみであり、対して被受容感尺度の2つの因子のうち、被受容感因子、被拒絶感因子は共に有意な相関がみられた。この結果から、コミュニケーションスキルのうち、友人関係において主観的幸福感を得るために必要なスキルは僅かなもののみであり、必ずしもコミュニケーションスキルを高めること、いわば社会が推奨している能力を持っていることが、友人関係における主観的幸福感を持つことにつながるとは限らないと捉えることができるのではないだろうか。

## 職場における人並み志向と適応感に関する検討

### 問題・目的

本研究では労働者のメンタルヘルスの要因の一つとして、人並み志向に着目した。目的は、職種による人並み志向の差について、個人の人並み志向と会社で求められる人並み志向のズレと職場適応感に関連について明らかにすることである。仮説は以下に示すとおりである。

仮説1：職種によって人並み志向の程度に差がある。

仮説2：個人の人並み志向と会社で求められる人並み志向のズレが大きい人は、職場適応感が低くなる。

### 方法

社会人197人（男性62人、女性135人）を対象にwebアンケートを実施した。質問内容は(1)個人属性（性別や職種など）、(2)「個人の人並み志向」14項目、(3)「会社の人並み志向尺度」14項目、(4)「職場適応感尺度」19項目であり、(2)～(4)はすべて5段階で評定するよう求めている。

### 結果・考察

まず個人と会社で求められる人並み志向尺度について、因子分析の結果を踏まえ、個人と会社に共通する「安定志向」と「我が道志向」の2因子を得た。次に、職種による人並み志向の程度の差を検討するため、一要因分散分析を行った結果、個人の人並み志向ではどちらの因子でも有意差が認められず、会社で求められる人並み志向では「安定志向」にのみ有意差がみられた。そこで Turkey 法を用いた多重比較を行ったところ、営業系が専門系と公務員に比べて「安定志向」が求められる程度が弱いことが明らかになった。最後に、個人と職場が求める人並み志向のズレと職場適応感の関連について検討するため、「安定志向」と「我が道志向」に関して個人と会社における差の絶対値を算出し、その差と職場適応感尺度の4因子間の相関係数を算出した。その結果、「我が道志向」の差と、適応感の「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼感・受容感」間に有意な負の相関が得られた。その他の間では有意な相関はみられなかった。

以上のことから、仮説2が支持されたといえよう。一方で、職種によって個人の人並み志向に差がなかったことから、就職活動の際には求職者、採用者ともに個人の人並み志向と職場が求める人並み志向の関係については考慮しない可能性が示唆され、そのことが職場適応感に関連することも推察できた。今後はさらに、職場における対人関係に着目し、その特性を含めた人並み志向の研究を行う必要がある。

## 問題・目的

本研究の目的は，過去のとらえ方と人との関わりについての考え方，思い出の品の種類が思い出の品の整理にどのように影響するかについて検討することであった。本研究では思い出の品の整理の状況を掃除の際に出てきた品を捨てるか否かに限定した。仮説は、①思い出の品を捨てられない人は，そうでない人よりも過去とのつながりを意識していて，過去を受け入れているとした。また，②思い出の品を捨てられない人は，そうでない人よりも人との関わりについて必要性を感じていて，協調することを大切にしているとするとした。さらに，③思い出の品の種類が捨てるか否かに影響を及ぼすとした。

## 方法

主に東海地区に住んでいる 18～25 歳までの 197 名(男性 97 名，女性 100 名)を対象に 2020 年 11 月上旬から 11 月中旬にかけて調査を実施した。質問内容は，作成した(1)「思い出の品の整理尺度(4 項目)」，(2)「人との関わり尺度(24 項目)」と，石川(2013)が作成した(3)「過去のとらえ方尺度」の一部(17 項目)で構成されていた。(1)は 4 件法，(2)と(3)は 5 件法で回答を求めた。

## 結果・考察

仮説である思い出の品の整理と過去のとらえ方および人との関わりとの関連を検討するため，(2)および(3)の尺度の下位尺度得点について(1)の各項目を要因とする 1 要因分散分析を行った。その結果，仮説①は手紙における「過去の受容的態度」のみ支持される傾向がみられ，その他の思い出の品では支持されなかった。また，「過去の連続的なとらえ」においてはいずれの思い出の品の場合でも支持されない結果となった。また，仮説②では，「関わりへの意欲的姿勢」因子はキーホルダーと手紙の場合に仮説を支持する結果となった。「関わりの必要性」因子はどの思い出の品でも仮説を支持しない結果となった。これらの結果から，思い出の整理と過去のとらえ方には物の種類に関係なく影響を及ぼす要因はないが，手紙における「過去の受容的態度」は捨てられるか否かと関連があると推測できる。また，思い出の整理と人との関わりでは，「関わりの必要性」との関連はいずれの思い出の品の場合でもないと考えられる。「関わりへの意欲的姿勢」は物の種類によっては思い出の品を捨てられるか否かに影響を及ぼすと推測される。したがって，仮説③は，「関わりへの意欲的姿勢」のみ一部支持される結果となったと考えられる。

## 対人関係において過剰適応はなぜ生じるのか

### —認知的共感力と拒否不安に着目して—

#### 問題・目的

本研究では、どのような要因が過剰適応傾向と関連するのかを検討することを目的とする。その要因として「認知的共感力」「拒否不安」という二つの性格特性を挙げ、それぞれの程度が高いほど過剰適応の程度も高くなるという仮説を立てた。なお交互作用は生じないと推察した。また性別や、共学出身者と女子校出身者という出身校による差にも焦点を当て、検討した。

#### 方法

東海圏に在学する高校生大学生 182 名（男性 26 名、女性 156 名、男性の共学出身者 26 名、男子校出身者 0 名、女性の共学出身者 69 名、女子校出身者 87 名）を対象に 2020 年 10 月上旬から下旬にかけて Google フォームによるインターネット調査を行った。質問内容は、既存尺度である「現実認知的共感力項目（3 項目）」「拒否不安項目（9 項目）」と「青年期前期用過剰適応尺度」の一部（24 項目）を使用した（全 36 項目）。なお各質問において「1.全く当てはまらない」から「6.とてもあてはまる」の 6 件法で評定を求めた。

#### 結果と考察

まず、性差について  $t$  検定を行ったところ、すべての変数で有意差は認められなかった。次に出身校による差があるか否かを検討するために  $t$  検定を行ったところ、「認知的共感力」「期待に沿う努力」「自己抑制」「他者配慮」の程度に差はないが、「拒否不安」においては出身校による差が認められた。このことから、共学の環境の方が女子校の環境よりも拒否不安が高く、友人関係から孤立することを恐れているといえるだろう。

続いて「認知的共感力」と「拒否不安」が、過剰適応の程度に影響があるか否かを検討するために、中央値で high 群と low 群に分類し二要因分散分析を行った。その結果、「自己抑制」因子における認知的共感力を除いた「認知的共感力」「拒否不安」ともに主効果は認められ、多重比較においても有意差がみられた。従って「認知的共感力」「拒否不安」という二つの要因が過剰適応の程度に影響を及ぼしているという仮説は一部支持された。これらの結果から、「認知的共感力」「拒否不安」という特性が過剰適応に影響するとともに、自己への抑制に関しては「認知的共感力」の影響が認められないことが示された。今後の課題としては「自己抑制」の生起要因について「拒否不安」だけではなく、母親のしつけや家庭環境というような性格が形成される前段階の要因からの再検討が求められる。

## ロマンチック度と配偶者選択における経済力願望志向が

### 学生時代の交際相手との結婚願望に及ぼす影響

#### 問題・目的

本調査では子供から成人への移行期間である大学生時に絞り、どのような人が実際の交際相手との結婚願望を持つのかを明らかにし、大学生時の交際相手との結婚願望を持つ人と持たない人の違いを検討することを目的とする。その要因にロマンチック度と配偶者選択における経済力願望を上げ、具体的にはロマンチック度が高く配偶者選択時に相手に経済力を求めない傾向にある学生は学生時の交際相手との結婚願望が高いという仮説を立てる。さらに、男性、女性別に大学生のロマンチック度、配偶者選択における経済力願望と結婚願望との間にいかなる関連が見いだされるかに焦点をあてる。

#### 方法

大学生・専門学生・短期大学生・大学院生の中で、入学時以降に一度でも交際相手がいたことがある人を対象（214名、男性58名、女性156名）とし、Googleフォームで質問紙を配布、回答を依頼した。尺度は、結婚願望項目（高坂・小塩，2015）の4項目、ロマンチック希求尺度の田坂・小松・武井・槻館(2011)の6項目、既存の尺度と自ら考えた項目から構成された9項目からなる配偶者選択における経済力願望項目を使用した。結婚願望尺度を回答する際、現在交際相手がいる回答者には現在の交際相手、現在交際相手がいない回答者には高校卒業時からの学生時にいた交際相手のなかで最も期間が長い交際相手を思い浮かべてもらい、その人との関係、当時の関係について当てはまるものを回答してもらった。

#### 結果・考察

各尺度において性差があるか否かを検討するため「結婚願望尺度」「ロマンチック希求尺度」「配偶者選択における経済力願望尺度」の平均値に対して、男性と女性との間で対応のないt検定を行った。その結果、「配偶者選択における経済力願望尺度」のみに有意差がみられた。次に男女別に「ロマンチック希求尺度」「配偶者選択における経済力願望尺度」の高群、低群の組み合わせからなる4群に分類し、「結婚願望尺度」を従属変数とし「ロマンチック希求尺度」と「配偶者選択における経済力願望尺度」を独立変数とした二要因分散分析を行った。分散分析の結果、男性は有意な交互作用、2つの要因の主効果ともにみられなかった。一方、女性では有意な交互作用、2つの要因ともに主効果が認められた。そのため、多重比較の検定をおこなったところ「ロマンチック希求尺度」が高く「配偶者選択における経済力願望尺度」が低いほど「結婚願望尺度」得点は高かった。よって、仮説は一部支持された。今後は、男性が大学生時の交際相手を結婚相手として見ない背景にどんな要因があるのかを検討する必要がある。

## 援助要請回避傾向に影響する要因の検討

### 問題・目的

本研究の目的は、他者に援助を求めない現象が起きる要因について明らかにすることである。その要因として、悩みを抱えていることを誰にも知られたくないという気持ち（以下、悩み保有状態の露呈忌避傾向と示す）を挙げ、仮説を立てた。(1) 悩み保有状態の露呈忌避傾向が高いほど援助要請回避傾向が高くなる。また、このような傾向に陥る要因として、公的自意識と悩みを抱えていることに対するネガティブな評価の2つを挙げ、仮説を立てた。(2) 公的自意識と悩みを抱えていることに対するネガティブな評価の傾向が両方高ければ悩み保有状態の露呈忌避傾向が高くなる。よって、交互作用のみ有意になり、それぞれの主効果は見られない。

### 方法

大学生 167 名を対象に Google フォームでの質問紙調査を実施した。質問紙は、既存尺度である「公的自意識傾向項目（11 項目）」「援助要請回避傾向項目（5 項目）」と自ら作成した「悩み保有に対するネガティブ評価項目（9 項目）」「悩み保有状態の露呈忌避傾向（8 項目）」を使用した。

### 結果・考察

まず、仮説（1）の検討として悩み保有状態の露呈忌避傾向得点と援助要請回避傾向得点の相関分析を行った。その結果、この2つの間に正の中程度の相関（1）があり仮説が支持された。よって、悩み保有状態の露呈忌避傾向が高いほど他者に援助を求めなくなるといえる。次に、仮説（2）の検証として公的自意識、悩み保有に対するネガティブ評価を独立変数、露呈忌避傾向を従属変数として、2×2の2要因分散分析を行った。その結果、有意な交互作用は見られず、仮説（2）は支持されなかった。その一方、公的自意識の主効果が有意であった。これらの結果から、公的自意識が悩みを抱えていることを知られたくないという意識に繋がり、援助を求めなくなってしまうと考えられる。そこで公的自意識を低くすることが不適応状態を脱するのに有用だろうと考えられる。そのために、今後の課題として公的自意識傾向を低くする方法を検討する必要がある。また、悩み保有状態の露呈忌避傾向の要因の再検討が求められる。

肯定的解釈と楽観性、ユーモアが被叱責場面での心理的反応に及ぼす影響についての検討

### 問題・目的

本研究では、他者から叱責を受ける被叱責場面において、その際受けた心理的苦痛を素早く克服するための意識と、相手に対してネガティブな感情を抱かないための意識について検討することを目的とした。そこで、肯定的解釈、ユーモア、楽観性の3つをあげ、①肯定的解釈、ユーモアのどちらか一方でも高ければ、叱責によって受けた心理的苦痛を素早く克服する、②叱責を受けた相手に対して、肯定的解釈や楽観性が高い者ほどネガティブな感情を持ちにくく、ユーモアが高い者ほどネガティブな感情を持ちやすいと仮説を立てた。

### 方法

18～22歳の大学生を中心とする182名を対象に、web上で調査を行った。質問内容は、(1)肯定的解釈、(2)ユーモア、(3)楽観性、(4)被叱責場面での心理的苦痛を抱え続ける期間、(5)被叱責場面で相手に抱くネガティブ感情（いらだち、恐れ、嫌悪）を測る質問があり、(1)、(2)、(3)については「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」の6件法で回答を求めた。(4)については心理的苦痛を抱え続ける日数を回答させ、(5)についてはそれぞれの感情について1点から5点で評定させた。

### 結果・考察

仮説①を検証するため、肯定的解釈とユーモアを高低群に区別して2要因分散分析を行った。その結果、それぞれの主効果と交互作用が認められ、2つのうちどちらか一方でも高ければ被叱責場面での心理的苦痛を素早く克服することが明らかになり、この仮説は支持された。次に、仮説②を検証するため、いらだち、恐れ、嫌悪のネガティブ感情得点と肯定的解釈、ユーモア、楽観性得点の相関係数を算出した。その結果、肯定的解釈と楽観性の2つがネガティブ感情と負の相関を示したため、「肯定的解釈や楽観性が高い者ほど叱責を受けた相手に対してネガティブな感情を持ちにくい」という点において仮説は支持された。しかし、ユーモアについては有意な相関が示されず、「ユーモアが高い者ほど叱責を受けた相手に対してネガティブな感情を持ちやすい」という点において、仮説は支持されなかった。本研究の結果から、肯定的解釈やユーモアといった意識を持つことで叱責による心理的苦痛を素早く乗り越えることができ、さらに、叱責を楽観的な態度で肯定的にとらえることによって、相手との関係が悪化するのを避けることができると考えられる。本研究では叱責を受ける側に焦点を当てたため、これらの知見は、すべての人にとって有用なものとなる可能性があるといえるだろう。



# 実行機能および社会志向性が社会的適応行動に及ぼす影響

## 問題・目的

本研究は、実行機能及び社会志向性が社会的適応行動に及ぼす影響について明らかにしようとしたものである。近年では、適応行動に影響を及ぼす要因として実行機能の存在が注目されているが、単に実行機能の能力が高いよりも、社会志向性という適応に対する方向性が加わることによって、社会適応的な行動がより生起されやすくなると考えられる。そこで本研究では、実行機能と社会志向性は交互作用的に働き、その効果が社会的適応行動の出現に影響を与えるという仮説を設定し、これを検討した。

## 方法

大学生 181 名（男性 55 名、女性 126 名）を対象に“Google フォーム”を用いたウェブアンケートを実施した。質問内容は、関口・紺田・中山（2009）による実行機能を測定する尺度 12 項目、伊藤（1993）の社会志向性尺度 9 項目、菊池（1998）による社会的スキル尺度 KiSS-18 を参考にして作成した社会的適応行動を測定する尺度 18 項目で構成されている。回答は、いずれも 5 段階で評定するよう求めた。

## 結果・考察

社会的適応行動への影響を検討するため、実行機能の下位尺度である切りかえ、更新の 2 つと社会志向性の計 3 つを独立変数、社会的適応行動の下位尺度である対人行動と自己統制行動の 2 つをそれぞれ従属変数とする重回帰分析を行い、実行機能と社会志向性の交互作用を投入した場合とそうでない場合の結果を比較して、その効果を検討した。結果は、対人行動を従属変数とした場合に、更新と社会志向性の交互作用効果が有意であり、交互作用による対人行動への影響力の増加が確認された。また、自己統制行動を従属変数とした場合については、切りかえと更新ともに社会志向性との有意な交互作用効果が見られ、自己統制行動への影響力の増加も確認された。したがって、実行機能と社会志向性が交互作用的に働き、その効果が社会的適応行動の出現に影響を与えるという仮説は一部支持されたといえる。また確認された交互作用項に対して単純傾斜分析を行ったところ、実行機能における更新の能力については、社会志向性が高い場合に社会的適応行動との正の関係が認められた。

本研究によって、実行機能における更新の能力については、社会に適応したいという意欲と組み合わせることで、適応的な行動を高めることが示された。その一方で、切りかえの能力に関しては、動機づけや意欲とは関係なく、思考を柔軟に切りかえていけることそのものが社会適応的な行動につながるということが明らかになった。また、自己の感情を適切にコントロールしようとする自己統制行動に限っては、切りかえの能力に弱さがあっても、社会適応への意欲がそれを補い、適応行動を生起させる可能性が示唆された。よって今後は、社会志向性を高めるアプローチにも着目し、検討していくことが必要となるだろう。

# 対面時の発言に対する配慮意識と SNS における発言時の配慮意識

## －共感性、アサーション、社会考慮との関連による検討－

### 問題・目的

近年、SNS 上の誹謗中傷が問題視されていることを踏まえ、本研究は対面および SNS での発言時の配慮意識に着目する。この配慮意識に関連するものとして、他者理解、ものの伝え方、誹謗中傷の社会問題化という側面から共感性、アサーション、社会考慮の3つの個人特性を取り上げ、対面状況と SNS の発言時の配慮意識との関連について探索的に検討することを目的とする。

### 方法

18 歳～23 歳の男女 170 名を対象に質問紙調査を実施した。質問内容は、(1)各状況の発言時の配慮意識に関する質問（ただし、対面会話状況と SNS 状況で場面分けを行い質問し、各 13 項目）、(2)多次元共感性尺度（24 項目）、(3)アサーション行動尺度（12 項目）、(4)社会考慮尺度（12 項目）である。(1)は 7 件法、それ以外は 5 件法で尋ねた。

### 結果・考察

各尺度の因子分析を行い、内的整合性を確認したうえで、全因子間の相関係数と偏相関係数を算出し、所々に .20 程度の弱い相関がみられた。その相関係数、偏相関係数を踏まえて、各状況の発言時に生起する配慮意識と共感性、アサーション、社会考慮の関連について共分散構造分析を用いて検討し、右の4つのモデルを提起した。これらのモデルから、発言時の配慮意識には、どちらの状況にも周囲からの影響の受けやすさという側面からみると、対極的な位置にある被影響性と自己主張が否定的結果に同じ影響を与えていることをはじめとする共通点がみられた。また、SNS 状況にのみ適切性考慮に共感性の自己指向的な認知傾向である想像性が影響を与えているといったいくつかの相違点も示された。これらの相違点は匿名性が高いという SNS の特徴が要因として考えられる。2つの状況の発言時の配慮意識の共通点と相違点を考慮して、SNS での発言時には、対面時以上に目には見えないがインターネットでつながっている他者をより深く考え気持ちを寄せることを意識する必要性が本研究において提起できるだろう。

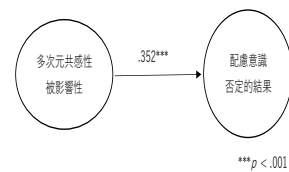


Figure 1  
対面会話状況における否定的結果

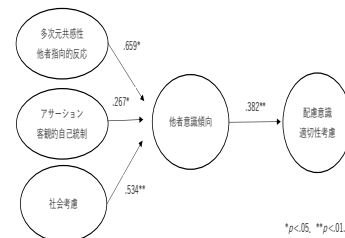


Figure 2  
対面会話状況における適切性考慮

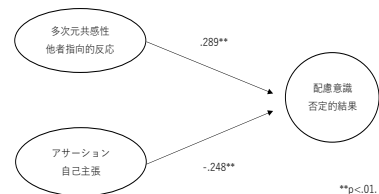


Figure 3  
SNS状況における否定的結果

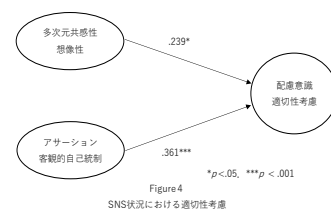


Figure 4  
SNS状況における適切性考慮

## 大学生における SNS ストレスに影響する要因の検討

### 問題・目的

本研究は、SNS 利用時に感じるストレスに影響する要因について検討することを目的とする。SNS には大きく分けて、自ら情報を発信するという面と他者の情報を閲覧するという二つの利用方法があることから、SNS 利用時に感じるストレスは 2 種類あると推測した。それに影響する要因として、自己愛傾向尺度の注目欲求を挙げ、次の 2 点の仮説を立てた。(a) 注目欲求が高い人ほど SNS ネガティブ感情を抱きやすい、(b) 注目欲求が高い人ほど SNS に振り回される。

### 方法

愛知県の大学生 186 名（男性 49 名、女性 137 名）を対象に、2020 年 10 月 9 日から 19 日（10 日間）にかけて、質問紙調査を実施した。質問内容は、(1) 「SNS 利用頻度」、(2) SNS に振り回される程度を測定する「SNS 翻弄尺度（12 項目）」、(3) SNS 利用時に感じるネガティブ感情の程度を測定する「SNS ネガティブ感情尺（9 項目）」、(4) 自己愛傾向尺度の「注目欲求（10 項目）」を使用した。

### 結果・考察

注目欲求項目得点と、SNS 翻弄項目得点、SNS ネガティブ感情項目得点との関連について相関係数を用いて検討を行った。その結果、SNS 翻弄尺度と SNS ネガティブ感情尺度ともに注目欲求と正の相関が見られ、2 つの仮説はどちらも支持された。

特に、自分の記事・発言から自分の存在や日常をより良いものとして他者にアピールするような項目と注目欲求項目の間に強い正の相関が見られたことから、SNS を「自己宣伝の場」として利用していることが改めて示唆された。自由に自分のことを発信することができる SNS において、「注目されたい」という気持ちが強い程、自分をより良く見せようとしていたり、無理に背伸びした投稿をしようとするなど、SNS に振り回されやすくなる。

また、SNS では、SNS から得られる情報から他者への偏った印象や知識を閲覧者に形成させてしまうため、他者の投稿から見える楽しそうな場面や発言を多く見ることで、自分と比較し、「注目されたい」という気持ちが強い程、劣等感や孤独感などのネガティブな感情を抱きやすくなる。

本研究では、SNS を利用する際、自己愛傾向の注目欲求が高いほど、「注目されたい」という気持ちが強い反面、他者の目を気にすることで SNS に振り回されたり、他者と自分を比較してしまうことでネガティブな感情を抱きやすくなることが明らかになった。

## 実利的恋愛観と同性愛者との親密な関係構築との関連

### 問題と目的

本研究の目的は実利的な恋愛観と異性に対する親密行動の関係についての検討である。ここでいう実利的恋愛観とは、恋愛を自己実現や地位向上の手段であると考え、恋愛観のことを指す。同性愛者の非受容の原因を探ることで、同性愛者が受容されるための手がかりがつかめる可能性がある。そこで、同性愛者が受容されない要因を同性愛者の種としての生産性と受容する側の恋愛観にあると考え、恋愛に自己実現や目標の達成を求める傾向がある実利的恋愛観傾向が強い人ほど、魅力的な同性愛者の異性に対して親密になろうとはしないという仮説を立てた。

### 方法

中部地区の大学生 194 名(男性 75 名, 女性 119 名)を対象に質問調査を行った。質問紙は、松井豊(1993)の LETS-2 (Lee's Love Type scale 2nd version) におけるプラグマ (Pragma) とこれに相反するエロス (Eros) の項目を参考に作成した①「実利的恋愛観傾向項目 (18 項目)」と、「自分から恋人になろうとするか」「自分から友人になろうとするか」「あちらからアプローチがあれば友人になろうとするか」の 3 つの場合で親密行動の有無を問う②「親密行動に関する質問項目 (3 項目)」から構成されており、前者は「全く当てはまらない (1 点)」「あまり当てはまらない (2 点)」「どちらともいえない (3 点)」「少し当てはまる (4 点)」「よく当てはまる (5 点)」の 5 件法、後者は「する」「しない」の 2 件法で回答を求めた。

### 結果と考察

同性愛者に対する親密行動に実利的恋愛観傾向の高さによって実利的恋愛観傾向の高さに差が表れるのかを検討するために  $t$  検定を行った。その結果、「恋人になろうとする」「自分から友人になろうとする」「あちらからアプローチがあれば友人になろうとする」の全ての場合で有意な差が見られたため、実利的恋愛観傾向が強い人ほど、魅力的な同性愛者の異性に対して親密になろうとはしないという仮説は支持された。この結果から、実利的恋愛観傾向の高さは同性愛者の非受容の要因の 1 つであることが示唆された。また、全体的にみると友人関係の構築においては親密行動をする者が過半数近くいるという結果が出ていることから、同性愛者の種としての非生産性自体が非受容に繋がっているのではなく、むしろこれから生じた社会で共有されているマイナスな社会的通念こそが非受容の要因であると考えられる。よって今後は種としての非生産性から生じたマイナスな社会的通念と同性愛者の非受容との関連を再検討するとともに、このイメージをいかに払拭していくかが問題になるだろう。

# 嫌なのに断らないのはなぜか —自己愛と自己観からの検討—

## 問題・目的

本研究では、他者から嫌なことを依頼された際、それを断る人と断らない人の違いを検討するため、その要因として評価過敏性自己愛、誇大性自己愛、相互独立的自己観、相互協調的自己観の4つを取り上げた。そして、評価過敏性自己愛傾向が高い学生、相互協調的自己観が高い学生ほど他者から嫌なことを依頼されたときにそれを引き受けやすく、誇大性自己愛傾向が高い学生、相互独立的自己観が高い学生ほど他者から嫌なことを依頼されたときにそれを断りやすい、という仮説を設定した。加えて、依頼内容が長時間を要す労働を求められる重いものである場合、短時間で済む簡単な作業を求められる軽いものである場合の2つと、依頼をしてきた相手が、自分と同じ立場で親しい者、自分と同じ立場で親しくない者、自分より上の立場の者である場合の3つを掛け合わせ、計6つの場面で嫌なことを依頼された際の断りやすさがどう異なるかを検討した。

## 方法

学生198名を対象に2020年10月から11月までの間に調査を実施した。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)「評価過敏性—誇大性自己愛尺度(18項目)」、(3)「相互独立的—相互協調的自己愛尺度(改訂版)(20項目)」、(4)「依頼された際の拒否・承諾に関する項目(6項目)」から構成された。なお、(2)および(3)は5段階のSD法、(4)は4件法で回答を求めた。

## 結果・考察

依頼を断るか引き受けるかの違いで、評価過敏性自己愛、誇大性自己愛、相互独立的自己観、相互協調的自己観それぞれに差が表れるのかを検討するために、依頼された状況別でt検定を行った。その結果、同じ立場で親しい相手から内容の重い依頼を受けた場合のみで、相互独立的自己観に有意差が認められたため、相互独立的自己観が高い学生ほど他者から嫌なことを依頼されたときにそれを断りやすいという仮説は一部支持された。このことから、他者から嫌なことを頼まれた際、その頼みごとをしてきた相手が自分と同じ立場で親しい、かつ依頼内容が長時間を要す労働を求められるような場合、相互独立的自己観が依頼の引き受けやすさに関係していることが推察された。一方、評価過敏性自己愛、誇大性自己愛、相互協調的自己観では有意差は見られなかった。

また、依頼を承諾する可能性の高さを表す依頼承諾得点の平均値を依頼状況別で比較した結果、目上の相手と同じ立場で関わりのない相手からの依頼に比べ、同じ立場で親しい相手からの依頼は、引き受けたくないと思っている場合でも多くの学生は断りにくいことが示唆された。さらに、依頼内容が軽度なものである場合は依頼を断りにくい一方で、重いものであれば断りやすい傾向にあることがわかった。本研究の結果から、個人の性格的特徴よりも頼みごとをしてきた相手との親密さと依頼内容の軽重が引き受けたくない依頼の拒否・承諾に大きく関係している可能性が示唆された。